

伊豆の国市郷土資料館

資料館だより

Vol.4

目次

表紙	… (1)
テーマ展示より	… (2)(3)
現場スタッフのおススメ!	… (4)
インフォメーション	… (4)



写真(上) 葛城山山頂の麦草文学碑

(下) 郷土資料館から見える葛城山山頂

葛城山(小坂く神島)のことを、地元の住民は親しみをこめて「おうどつきよ」「寝釈迦山」と呼んでいました。当館収蔵の豆州田方郡神益中嶋村絵図(寛政十年(一七九八))にも「おふどっけ」と記されています。山頂の葛城神社脇には小坂の俳人・萩原麦草の碑が建っています。



いんやうは富士の全夜良夜かな

葦城（1869-1949）

（俳人紹介）

スゴ腕技術者、俳人となる
遠藤葦城（兵作）は、父・久七、母・しげの長男として葦山村土手和田に生まれます。伊豆学校（現・県立葦山高校）を卒業。鉄道工務所で九州・三角線や南海鉄道、函樽線などの工事に従事し、難所の橋梁や隧道建設で実績をあげ、間組に入組します。間猛馬組長の片腕として、国内だけではなく、北は樺太、朝鮮半島や満州、南は台湾まで、綿密かつ慎重に大型工事をこなしていきましました。組長の別府引退後は、事業全般を監督する重任に就き、昭和四年（一九二九）に六〇歳で退職後も間組相談役として組の経営に携わりました。間組の同僚であった楠目橙黄子（省介）の影響で俳句を始めたのは、朝鮮半島赴任中。大正三年（一九一四）より高浜虚子に師事し、朝鮮俳壇に名を残します。大正十三年（一九二四）はじめて虚子が満州を訪問した際には、橙黄子とともに案内役を務めました。昭和十二年（一九三七）四月より『ほととぎす』の同人。昭和二十四年（一九四九）七月一日に八十一歳で亡くなった後発行された『遠藤葦城句集』では、序を高浜虚子が記しています。『ほととぎす』同人中で最年長者でした。

山茶花の霜する朝をたぢいで、 富士の息へ伊豆人わかれ

穂積忠（1901-1954）

（歌人紹介）

先生は歌人！
穂積忠は、田中村吉田（旧大仁町）で明治三十四年（一九〇一）、六亮・ふさ夫妻の長男として生まれます。当時の穂積家は、伊豆有数の素封家でした。祖父・父ともに俳諧の宗匠という環境で、五歳の時には句作を始め、大正三年（一九一四）に県立葦山中学校に入学したころには句作に専心していました。二年生の時、英語教師・加藤在巢の勧めで北原白秋入門、作歌に励みます。病氣療養を経て大正九年（一九二〇）に葦山中学を卒業すると、釈超空（折口信夫）を慕って國學院高等師範部（現・國學院大学）に入学し、同時に白秋の元へも通いました。

國學院卒業後は松本高等女学校、三島高等女学校、母校葦山中学校に赴任。二十八歳の時、母校の校歌を作詞します。昭和十四年（一九三九）に第一歌集「雪祭」を刊行。戦中・戦後を通して伊東高等女学校や三島南高校の校長を歴任し教育者としての実績もあげつつ、北原白秋・釈超空を助け、作歌活動や歌雑誌編集にも力を注ぎます。
恩師釈超空急逝から一年後の昭和二十九年（一九五四）二月、忠も急性心臓疾患で五十二歳の生涯を閉じました。

その上りの秋風聞くや寝釈迦山

麦草（1894-1965）

（俳人紹介）

おうどつきよを愛した土の俳人
寝釈迦山とは「おうどつきよ」（葛城山の別名）のこと。麦草は明治二十七年（一八九四）、おうどつきよの麓、川西村小坂（旧伊豆長岡町）に、萩原三作・ため夫妻の長男として生まれます。本名・萩原三郎。明治四十二年（一九〇九）に村立奨弘尋常小学校（現・市立長岡南小学校）高等科を卒業し、農業を営むかたわら句作に取り組みます。城吟社に入って「紫朗」・「西洋城」を号し、大正五年（一九一六）から「麦草」を名乗ります。その二年後には「狩野川句会」を主宰して渡辺水巴に師事し、「曲水」の同人となります。大正十四年（一九二五）に上京して日本通運に勤めますが、昭和二年（一九四五）には疎開で帰郷します。小坂に戻った後も句作、句会の開催、句集の編さんに努め、昭和三〇年（一九五五）には静岡芸芸作家協会理事となりました。

石田波郷は、中村草田男・加藤椒邨とともに難解派・人間探求派と呼ばれた戦中・戦後俳壇の重鎮で、麦草と親交が深かった人物の一人です。昭和四〇年（一九六五）一月三日も伊豆長岡の旅館月光園で、麦草と波郷夫妻らは夜更けまで歓談し楽しみました。麦草は帰宅後に狭心症でたおれ、七十歳でこの世を去ります。

テーマ展示「伊豆国文学案内2」より 伊豆の国市の文学碑



安藤の調査記録

コラム 井上靖（1907-1991）と安藤尊夫（1918-2003）

市文化財課では『伊豆長岡町史』『大仁町史』『葦山町史』を販売しています。旧葦山町で『葦山町史』の編纂準備として行われた資料の収集・調査・研究や刊行された町史から漏れた調査報告・論考は、「葦山町史の栞」（昭和52年（1977）～平成10年（1998）全22集※）で取り上げられました。「葦山町史の栞」の「葦山」という題字は、文豪・井上靖によるものです。当時、葦山町史編纂委員だった安藤尊夫の依頼により実現しました。

安藤尊夫は、井上靖の父方の従兄弟（安藤重宣）の子です。昭和53年（1978）から葦山町史編纂委員として民俗部門を担当しました。当館には、安藤が昭和49年（1974）から平成3年（1991）の長年にわたって実施した葦山町内の民間信仰や石造物（道祖神や地藏尊、馬頭観音など）調査記録が残されています。『葦山町史』や「町史の栞」には取り上げていない内容や写真も含まれ、土地利用が変化し道が整備・拡張される前の貴重な民俗の記録です。記録の中には調査手引も含まれ、安藤の几帳面で細やかな調査実態がうかがえます。

井上と安藤は若いころから親交が深く、井上が伊豆を訪れた際には安藤宅を訪問し、一緒に取材や旅行に出かけていたそうです。井上の『櫻の木』（昭和45年（1970）初出）の取材に安藤が同行し、安藤の道祖神の調査に井上がついて行くような仲でした。安藤の人柄と行動力に井上は信頼と愛情を、安藤も作家・井上靖に敬愛の念を強く感じていたことでしょう。井上は、安藤に一枚の色紙を贈ります。


「美しく尊く親しいもの。私たちの祖先の相談相手であった野の佛たち。」
井上靖によって色紙に書かれたこの詞は、安藤の長年にわたる調査研究に対して井上が贈った「ことば」です。現在、この詞を刻んだ碑は、中区の長源寺境内墓地に建っています。

※第3集までは「町誌」、第4集から「町史」に変更

【井上靖】

明治40年（1907）北海道北川郡旭川町（現・旭川市）で、軍医井上隼雄・八重夫妻の長男として生まれる。3歳から戸籍上の祖母・かのと天城湯ヶ島で暮らし、13歳で祖母が死去した後は、父の赴任地・浜松市に転校した。15歳の時に父が台湾赴任となったため、家族で三島に転居。17歳で沼津市の妙覚寺に下宿。京都帝国大学（現・京都大学）文学部卒業後、29歳で毎日新聞社に入社。昭和25年（1950）『闘牛』で第22回芥川賞を受賞、翌年退社し文筆活動に専念。「しろばんば」が雑誌「主婦の友」で連載開始されたのは昭和35年（1960）。平成3年（1991）年、83歳で逝去。

中央図書館・郷土資料館入口（三福）



城山の春秋の色…で始まる「大仁町婦人会会歌」の歌詞も穂積忠によるものです。中央図書館入口に記念碑があります。

女塚史跡公園（浮橋）

隆信のゑがく頼朝像みたるとき
ただならぬ英雄越列機の如く来し
死を選びし八重姫いとし
大きな心をいだき生くべかりしを

中河与市
窪田空穂
萩原麦草
上田五千石
水原秋桜子
石田波郷

願成就院（寺家）

寂かにて願成就院梅雨はれぬ
時政がふるさとに残す露の墓

水原秋桜子
石田波郷

最明寺（長岡）

時頼の墓へ磴積む落椿
最明寺時頼よりの時雨ふる

上田五千石
萩原麦草

近現代文学碑

まだまだあります！



現場スタッフのおススメ!



勾玉の展示と 勾玉づくり教室

資料館の展示室では、市内の遺跡から発掘された石製やガラス製の装身具を紹介しています。縄文時代から古墳

時代にかけて「呪具」や「威信材」

(権力や身分の高さを示す財物)として利用されました。

その中でも来館者から人気の高い展示資料の一つが

「勾玉」です。特に、田京区の段

遺跡古墳石室からみつかったメノウ製の勾玉は、淡いピンクでほっそりとした形状をし、ついうつと

りと見入ってしまいます。

勾玉の形状の由来には、さまざまな説があるそうです。もとは動物の牙からつくったから、とか、お母さんのおなかの中にある胎児をかたどっている、とか、巴形をうつしているとか...

いっしょうけんめい滑石をけずります



勾玉完成!

縄文時代のけつ状耳飾りが原形であるという説もあります。当館では、ヒスイ製のけつ状耳飾りも展示していますので、実際に見比べてみるとおもしろいですよ。

ところで、当館では、この勾玉をお手本に、毎年、小・中学生対象の勾玉づくり教室を開催しています。

本年度は、十一月八日(日)

に小学生が茅野つ子ひろばにおいて、滑石を使つた勾玉づくりとマイギリ式の火起こしに挑戦しました。「勾玉ってどんな意味?」

「ヤスリがない時代に、どうやってけずったの? 時間はどれくらいかかったの?」

毎回さまざまな疑問や意見が飛び出し、こどもたちが歴史や郷土に関心をもち「第一歩」になっています。

施設案内

開館時間 午前九時～午後四時三〇分
休館日 月曜日 毎月最後の金曜日
年末年始(十二月二十八日～一月三日)

六月最終週の館内整理期間

(図書館休館日に準じる)

料金 無料

所在地 静岡県伊豆の国市三福二五三・一

(伊豆の国市立中央図書館二階)

問合せ 〇五五八・七六・五六七八

周辺地図



イベントメニュー

伊豆の国市郷土資料館 資料館だより vol.14
編集発行:伊豆の国市郷土資料館 令和三年三月十日
印刷:フタバ印刷株式会社